

アスピリン使用と大腸癌死亡率の低下

Aspirin use and reduced risk of fatal colon cancer: *Michael JT, et al* (N Engl J Med 325: 1593-1596, 1991)

1982 年秋にスタートしたアメリカ癌学会の癌予防に関する前向き研究に登録された 30 歳以上の 1, 185, 239 人の内で、1982 年調査時点でアスピリンの服用歴の欄にきちんと記載されていた 662, 414 人(白人のみ)について、服用歴と 1988 年までの大腸癌(直腸癌は除く)による死亡率の関係を調査した(調査率 98.2%)。登録前に 1 年以上アスピリンを服用していた者をアスピリン使用者とした。

年齢構成で訂正した 1 人当たりの大腸癌による死亡率を、アスピリン未

使用者を 1 として比較した。この相対危険度をアスピリンの使用頻度別に見ると、男性では月 1 回以下 0.77 (0.61 ~ 0.97), 1 ~ 15 回の者では 0.69 (0.52 ~ 0.93), 16 回以上では 0.60 (0.40 ~ 0.89) であり、女性ではそれぞれ 0.73 (0.56 ~ 0.96), 0.65 (0.46 ~ 0.93), 0.58 (0.37 ~ 0.90) であった(カッコ内は 95% 信頼限界)。調査開始時に悪性腫瘍、心臓病、脳卒中その他アスピリンの服用や大腸癌死に関連がある疾患を有する者は除外しても、全体の傾向は男女ともに同じであった。また、大腸癌のリスクファクターとされる食事、運動、肥満、家族歴を揃えて比較しても結果は同じで、1 か月間に 16 回以上アスピリンを服用していた者の大腸癌死亡率は、アスピリンを全く使用していなかった者の 1/2 であった。アセトアミノフェンについての同様の

調査で、大腸癌による死亡率の低下はみられなかった。

動物実験や疫学的研究でアスピリンが大腸癌を予防するとの報告があり、今回の前向き調査でもそれが証明された。この事実の説明として、アスピリンの直接作用、プロスタグランジン合成阻害、そのほか間接的に作用する因子の可能性が挙げられている。アスピリン使用による胃出血が早期発見のきっかけとなっている可能性や、アスピリン服用の原因となった疾患の存在が死亡率を下げている可能性も否定できない。

【訳者コメント】 どのような病状に対しても家庭薬としてアスピリンを服用する習慣があるアメリカならではの発表である。

(関東逓信病院消化器内科

古川恵 抄)